

2012年7月23日

東松島復興推進員だより(第11号)

～地を往きて走らず～

復興推進員が活動する宮城県東松島市は、「まち」を再構築をするため、心を一つにして邁進していく「一心」を復興スローガンとして新たな取り組みに積極的に挑戦している。

政府は「新成長戦略」の「21の国家戦略プロジェクト」として、「環境未来都市」構想を進め「誰もが暮らしたいまち」「誰もが活力あるまち」の実現に取り組んでいる。昨年12月に11都市を選定したが、東松島市も選定都市となった。

本年2月には、JICA横浜が実施した「環境未来都市構想推進セミナー」の研修員45名程が、東松島市役所を訪問し復興への取組状況と環境未来都市構想についてお話を伺っている。

また、市役所は環境先進国であるデンマークに職員を派遣し、風力発電技術やバイオマス発電の現状などを視察し、7月9日には在京大使館において、デンマーク国ロラン市との間で再生可能エネルギーの技術活用、人材育成などで、東松島市がロラン市から支援を受けることなどが盛り込まれた協定が調印された。7月19日には、市民向けに「国民幸福度NO.1デンマーク王国に学ぶ」東松島市環境未来都市フォーラムを実施し、市民と共に考える場づくりにも取り組んでいる。



97%の災害廃棄物が分別されリサイクルされる



通常年間ゴミの156年分の災害廃棄物

7月13日には住友林業株式会社と「復興まちづくりにおける連携と協力に関する協定」を締結した。これは、東松島市が復興まちづくりで推進する環境未来都市構想の具体案として、新たな産業の創出、木を軸とする「木化都市」の実現に向けて、民間企業が持つ技術や経験を積極的に取り入れていく事を目的としている。

東松島市が進める環境未来都市は、それを支える人材の育成も重要であり、7月17日には、太陽光パネルの設置技術の習得を目的とした「太陽光発電工事専門学校」を市内にオープンした。

太陽光発電の設置技術からメンテナンスまでをできる人材の育成を行う専門学校で、全国で3番目となる。

太陽光発電の普及のみでは新規雇用の創出につながらないと言われる中で、積極的に人材の育成にも取り組んでいる。

また、市が計画するバイオマス発電では、稲わらや糞、年に3回行われる草刈で出される植物などのバイオ廃棄物を積極的に利活用していく事をめざし、農家がこれらバイオ廃棄物をバイオ燃料として販売することで農家の個別収入の向上を目指すと共に、若者にとっても安定収入が得られる魅力的な農業の創出を同時に狙っている。



太陽光専門学校の開校式を視察する JICA 研修員



研修員受け入れについてインドネシア高官との

同市はこれらの取り組みを積極的に海外にも発信していきたいとの意向を有しており、JICAも技術研修員の受入れなどを通して、海外への発信、関係する企業の海外進出に貢献できればと考えている。

【復興まちづくり推進員ブログ】

<http://hmms0311fm.da-te.jp/>

【推進員だよりバックナンバー：JICA東北ホームページ】

<http://www.jica.go.jp/tohoku/enterprise/shinsai/index.html>

以上

JICAは、宮城県、東松島市、宮城大学、東松島まちづくり応援団（NPO）等と共同で「地域復興推進員」を通じた震災復興モデル事業を東松島市で開始しました。このモデル事業では、早期震災復興につながる”市民協働のまちづくり”を支援することを目指しています。ここで得られた教訓や経験を将来の国際協力に繋ぎます。
